

東 欧 点 描

富山県農村医学研究所 豊田文一

はじめに

1980年8月15日、チェコスロバキヤ・プラハにおいて日本-チェコ・プライマリ・ヘルスケアの合同シンポジウム、18日、ハンガリ・ペーチにおいて第2回国際農村医学会ヨーロッパ部会が開催され、日本より16名がこれに参加した。12日間の旅行ではあったが、学会を除き、充分印象に残る収穫に乏しかった。しかしこの短時間を利用し、できる限りそれぞれの国情などをうかがい、私なりの感想を披瀝してみたい。なお「東欧点描」と表題をしたためたが、自由主義国たるオーストリアについても触れてあるので、その点もご了承を願いたい。またプラハにおける合同シンポジウムについては別に記載する。

プラハ空港にて

北廻りの空港で、アムステルダムで乗り換え、約1時間でプラハ空港につく。ヨーロッパ大都市の空港のはなやかさに比べて、余りにも見栄えのしない空港である。着陸とともに機内へ兵士が乗り込んできて、パスポートを厳重に点検、それがすんだら降ろされる。この光景は、1976年、北京空港でも兵士が機内に入り、通過客（トランジット・パセンジャー）たる私のパスポートを取り上げ、給油の間待合室で待機させる。ここの待合室は開放的で空港外への出入り自由、外部からは一般の中国人も空港売店で品物を買うため出入り自由で、他の空港では余り見なれない情景で今でも記憶に残っている（毛沢東葬儀の前日）。

さて出国税関も厳重なチェック、次に気分

をこわしたことがある。それは入国に際して滞在1日につき1人10ドルをコルナ（チェコの貨幣単位）紙幣に両替が義務づけられていることである。40ドル、約360コルナ（1ドル＝9コルナ）の紙幣が封筒に入れられて手渡される。勿論強制的である。宿泊交通費は、すでに旅行社に払いこんであるので、これは小使である。所が出国のとき、残金があるとドルとの両替はほとんど不可能で、とにかく使いきらねばならない。しかも出国通関でコルナ紙幣持出し禁止で、すべて没収、つまり全部使ってしまうということである。如何にこの国の外貨保有が乏しいか、わかるような気がする。しかし懐の豊かな(?)日本人は、この位で4日間暮せるか、私どもとしてはその心情がわからない。ここは有名なクリスタル・ガラスの産地、一寸した土産品でも40ドル位はすぐ飛んでしまう。私もすぐ足らなくなり、さらに両替したし、トウゼックスというドル・ショップがあり、高価な買物はここですませるから、こんなような不愉快な仕事はしなくてもいいではないかと思うのは日本人的感覚である。

かつて私の教室のM君が、プラハで開かれた国際化学療法学会に出張したときも、この方法で両替させられ、かつ余分にドルを両替し、使い残したコルナ紙幣の交換手続が面倒で、残した紙幣は没収されたと憤慨していたことを思い、今なおこのようなことの続くチェコの状態を思うと、共産圏経済のきびしさが痛感される。

東側陣営で自由主義国たる西ドイツ、オー

ストリヤと境を接し、お互いスパイ活動が盛んで、紙幣の流出は、その活動を助長する考えと思われるが、とにかく私どもとしては不愉快に感じたことは事実である。



第1図 ブラハ・カレル橋上にて(左越山、右豊田)

研修所 宿舎

大学の濫觴は定かでないが、その発端はヨーロッパである。12世紀末、ボロニヤ、パリ(ソルボンヌ)、モンペリエ、オックスフォードなどが存在していたことは確かである。しかしそれらの創始の年代が、はっきりしていないのは設立されたのではなく、自然発生的のものであったからである。

大学を意味する中世のラテン語「Universitas」というものは、元来団体とか組合という言葉で、ギルド(Guild)と同意語である。ギルドというのは中世のヨーロッパの都市に発達した同業の自治体で、12世紀頃から商業手工業などの技術独占と福利を目的とした特権的な同業組合であるが、学問に携わる人々の組合は、大学だったわけである。最も古いといわれるイタリアのボロニヤ大学の例をとれば、大学は建造物もなく、教師の宅とか教会堂で議義を行い、一人の立派な教師がいると全ヨーロッパから学生が集まってくる。

この大学は、ローマ法とか教会法等の法律が主であった。ここで学生は市民権の概念、権利の保障を学ぶ。しかし、大学とはいうものの運営に要する予算はすべて学生によったもので、いわば学生が教授をやとうことになる。また全欧からきている学生達は、ギルドを作り、都市や教皇から権利をうけ生活を守ったのである。学生はその組合でRektor(学頭=学長)を選んで、Rektorを中心に、公務、租税、兵役の免除、学内の裁判権をえた。すなわち治外法権である。私はかつてハイデルベルグ大学を訪ねたとき、構内に石積みの半屋が残されており、古い時代の名残りとはいうものの驚異の眼を見張った。10数年前、大学紛争の嵐が吹きまわったとき、反対制派の学生が、大学自治とか、大学の治外法権を叫んでいたが、中世紀のヨーロッパの大学の成り立ちとは、日本の大学の成立が根本において相違し、その歴史的背景がちがう。

さて、カレル大学Karlova Universta(ブラハ大学)も古い歴史をもち、前記の各大学に劣らないといわれる。

今回のシンポジウムは、この大学の研修所で行われた。ここはブラハの郊外に近く、5階建てのしょうしゃな建物で、50人~60人の宿泊できる部屋をもち、いくつもの講堂、集会室、サロン、食堂も完備している。学問的雰囲気がただよっている。私の泊った室は2人用で、バスがなかったがシャワーがある。清らかな部屋で研修にふさわしく落ちついて勉強できる。窓外は果しなく続く圃場のうねり、所々に緑にはえる森林も望見できる。



第2図 研修所食堂の朝食

ここで感じたことは、わが国の大学でも是非このような施設を持ちたいことである。成る程、東京、名古屋、京都など数カ所に、留学生会館として文部省所管のものがあるが、最近とみに海外との交流が密になり、少なくとも各ブロックに一つずつ位はこのような施設を作り、留学生はもとより、外人学者の宿泊にも当てれば、地方文化の向上に資する所大であろう。

私も、金沢大学に在任中、少なくとも北陸の一つと、数次にわたり文部省へ予算要求したが、未だ実現せず心残りでもあり、力の足らなかったことを残念に思っている。

またこの研修所のホールで、諸外国の学者との懇親会もあり、未知の人々との交友を深め有意義であったと思っている。

買物の行列

ソ連や東欧に行った人は誰でも眼にする風景であり、体験もするだろう。1975年、モスクワ空港から市内に入ると異様な行列をみた。恐らく有名な劇場の前で入場券を買う行列だろうと思って、何とはなしガイドに聞いてみた。「パンを買う行列」だという。パンは主食である。そして買うのに行列とは、と初めてソ連に足を踏み入れたとたん、この国の裏側をみたような気がした。

プラハの街で、チェコを代表する土産品、ボヘミア・ガラス製品を買うため、トーゼックス（ドル・ショップ）へ立ち寄った。色鮮やかな装飾と切り込みの素晴しさは世界の最高といわれる。小さな店だが数十人の人がつめかけている。品物はすべてガラス・ケースの中に並べられ、手にとってみる事ができない。日本では買おうと思う品物は手にとり眺めすかしてからでないと買わない。ここではガラス窓の外から眺め、これと思う気に入った品を指示する。これも行列を作り、自分の番がこないと指示できない。やっと思いたい品を指さすと、店員はそれに対して伝票をく



第3図 会計の前の行列（ブタベストのドル・ショップ）

れる。この伝票をもって会計へ行行って金を払う。これも行列である。やっと思いで領収書をもらうと、またもとのガラス・ケースの前に戻る。これも行列で、やっと思自分の番にきて、領収書を見せると始めて欲しい品物が手に入る。万事がこんな調子で、また欲しいものがあると同じ繰り返しである。ここの係の店員は公務員であり、愛想もそっけもない、売ってやるというような気配も感ぜられる。数十人のお客さんに5～6名の係でやっているのだから無理がないかもしれないが、これに慣れない日本人は腹がたって仕方がない。買いたいものも買わずに帰る。

トーゼックスではないが、ソフトクリームを買うにしても、プラハの大通りで20～30人の行列、ホットドック屋の前では十数人、酒屋の前でも30人は並んでいる。



第4図 酒屋の前の行列（プラチスラバ）

成る程私的企業とちがって、働いても働かなくても同じ。利潤の配分もなく、月6万円ばかりの給与では、心情としてあるいは無理からぬかもしれないが、お客さんの方はイライ

ラして、それを解消すべきすべもない。チェコ語では文句もいえないし。

この様な経験はソ連でも味わったし、私には、生活様式は、ソ連並ということが改めて感じとられた。

ジブシーを見た

ブラハを訪れる人は、誰しも観光名所の一つとしてここの広場に立つだろう。チェレトナ通りをつき当たった所、旧市庁前である。12世紀の建造物で、ここの名物は、ただ古いというだけでなくその建物の正面、高さ20mばかりの所に小窓がある。その真下に時計がしつらえられ、各正時の鐘の音とともに、窓が開く。それを凝視していると窓の中からキリストの12使徒や死神が人々をのぞくように回転する。これを広場に群がる数百の人々が見上げている。私もその一人だが、ふとみると異様の風体をした老婆の一群がいる。髪の上に大きなリボンをつけたものや、白いマフラーで頭を被ったもの、そのまとう被服はえんじ色、青、緑など、歳にそぐわないカラフルなもので、多数の観光客のなかで、異様な印象を与える。しかもその顔貌は何のくったくもなく、朗らかに話し合っている。私はついていたガイドに、それらの老婆の正体を聞く。あれはジブシーだと答える。



第5図 ジブシーの老婆(ブラハ)

歌劇カルメンの奔放な、しかも情熱的な美貌、彼女へひたむきの愛情を燃やすドン・ホセ、さらに闘牛士エスカミリオとの恋のしが

らみなどが頭の中をかすめる。かつビゼーの南欧的な優艶な迫力と清新な旋律が耳に響く想いのなかで、この老婆の一群を見ていると、その幻想は彼方に消え去る。それも先に述べたような風体、西欧女性の中年期以降の肥満体、カラフルとはいうものの色のあせた被服、もの本で読んだイメージとは全くかけはなれている。私がかつてイランの砂漠でみた放牧民とは、その趣を異にしている。彼等は羊を追うことに生命をかけ、荒蕪たる砂漠にキャンプを張り、草を求めながら北に南に移動をつづけ、生涯同じ道を辿っている。

ジブシー(Gypsy)はヨーロッパ、南北アメリカなどの各地に散在する漂泊民族で、現在500万と推定され、そのうちヨーロッパには100~150万は住んでいるといわれる。その起源はインドの西北部で、9~10世紀頃より移動し始め、その多くは数家族の集団でホロ馬車によって放浪漂泊を続ける。皮膚は茶褐色、毛髪は真黒から暗褐色、身長平均165cmといわれ、欧州人に比べて低い。昔は奴隷いや賤業を主としたらしいが、現在独特の踊り、音楽は今でも南東ヨーロッパの酒宴には欠かせないものらしい。昔から歌舞音曲の他に、ばくろう、かじ屋、うらない師、また木製品(さじ、おけ、ふるい、むしろ、ほうき)、その他手品、動物芸、古着商、靴みがきなどで生活の糧をえているといわれる。世界各国でその定住性が認められているものの、その放浪性のため嫌われ、一部を除いては中世紀よりの漂泊を続けている。



第6図 酒場におけるジブシー(ブタペスト)

とにかく、私も多くの国々を廻ってみたが、この異様の風体、一目でジブシーとわかる老婆の一群を間近にとらえ、とくに印象深く刻みつけられたので、旅の一齣としてここに書き止める。

アパート群

古都プラチスラバは、中世紀の面影を残す石畳のある街で、ドナウ河に臨むスロバキヤの首都である。その古都も今はチェコの工業地帯で重工業、化学工業の工場が建設され、日本からのプラント輸出も近年とみに増え、わが国との関係も深いと聞く。ガイドの話によると、この工業化のため黒海沿岸からルーマニアを経由して2千百キロのパイプ・ラインをひいて石油を供給し、盟主たるソ連が如何に衛星国に寄与しているか誇らしげに語る。

私どもの案内されたのは工業地帯にあるアパート建設現場である。人口33万のこの都市に更に10万世帯のアパート建設を予定している。見れば高さ10数階のものがすでに林立し、現在7万人が入居している。その工法はプレハブ工法で、10数階のビルも、3~4ヵ月で完成し人が住めるようになる。みると巨大なクレーンで引き上げられたコンクリートの壁は、パタパタと張りつけられる。ただその支柱に鉄筋のおそまつさである。日本では到底建築許可がおりないだろう。このような情景を私はかつてレニングラードやシベリアの都市で見た。そのとき同行していた工学部の教授は見て驚いていた。というのは、地震となれば、あんなものはすぐ倒れてしまうと。チェコやソ連では地震がなければ幸いであるが、近くはアルジェーやイタリアの地震の惨事を思い出す。これも工業の急速な発展で農村地帯の人口が都市に集中し、住宅事情が逼迫し、これを急がねばならない。と同時に家賃は、最低生活を守るための基準でもある。ソ連では国営アパートは家族構成により広さが決定される。家賃は30㎡当たり1,600円、附属設備

(キッチン、トイレ、バスなど)の面積は無料、光熱費も1ヵ月1人当たり100円、しかも住居費は収入の10%以下に抑えてある。主要食糧は安く、最上の牛肉は1kg800円、牛乳1ℓ100円、最上質バター1kg1,200円などその他の食糧も同様である。その価格もソ連と略同様である。

このアパートは勿論国営で、規格統一、聞いた所によると1DK-2DKで、家賃はソ連並み、ただしひそかに聞いた所では、狭隘で住民の不満も根強いらしい。

しかし外観上数十棟もならぶアパート群の雄大さは眼をみはる。ただその脆弱さは別として。



第7図 アパート群 (チェコ、プラチスラバ)

国境線 (チェコとオーストリア)

日本のような島国では国境線という感覚は皆無にひとしい。プラチスラバからウィンに向う。その間66kmだが平坦な農村で、広大な圃場が展開している。バス旅行である。20分位で共産圏から自由主義国への境界である。高いやぐらを組んで監視所があり、税関のチェックも厳重きわまる。国道上には100台近くの車が停止し、動きようにもない。国境線は延々として眼のとどく限り三重の有棘鉄線が張られ、電流が流れていて、触れれば即死と聞かされる。西欧諸国の国境線も陸続きで同様だが、パーゼル駅を思い出す。パーゼルはフランス、西ドイツ、スイスの3カ国に分けられている。プラットフォームの中間に

税関があり、ここが国境線でフランスからスイスに入国をチェックする筈である。パスポートを出しにかかるとう面倒くさそうに手を振って向うへ行くと何の調べもせずに押しやる。

しかしここでは車内は勿論、トランク、さらに車体の下までもぐり込んで調べる。ウィーンまで1時間半と聞いていたが、とうとう3時間半もかかった。ただ私の車に乗っていたガイドは共産党員らしく、車内ででてくる言葉は「ソ連礼讃と衛星国の誇示だけで、第二次大戦でソ連軍のドナウ渡河の地点に車を止め、そこに立つ記念碑の説明に時間を費した。しかしいいこともある。待たされるだけ待たして税関につくと、その男が警戒の兵士達と話し合っていたと思うと、簡単な車内立ち入りだけで通過、恐らく係員に袖の下でもはずんだのではなかろうかと思われて仕方がなかった。(このことは東南アジアではよくある手だが) なおオーストリアに入ってから聞いた話だが、チェコからオーストリアへの国境脱出者は1日平均8名、年間3,000名が、有棘鉄線をかいくぐって自由国家にあこがれて脱出する。ある人の話によると監視哨の銃口は常に自国側に向けられているという。

噴水と銅像

予定よりかなり遅れて、黄昏ときウィーンに入る。街の中央広場に美しい噴水が夕陽をあびて五色に彩られている。チェコからのガイド曰く「ソ連及び同盟軍はヒットラー軍を壊滅し、オーストリアを解放した。そして10年間ここに駐留し、オーストリア国民の生命と安全を守った。ここに解放記念の銅像をたて、永久にその功績を称えている。」窓外をみても銅像が見あたらない。しかしそういわれてみると高くふき上げられている噴水の隙間から銅像らしいものが見える。銃剣をかざした兵士の姿である。あとで私どもと行を共にしたウィーンのガイドの話は印象深かった。戦後オーストリアの保障はソ連、英、仏によって支

えられた。しかしここの人々は共産圏に対して嫌悪の情をもっていたらしい。ソ連撤収後もこの銅像は残された。しかしその後、この銅像が直接市民の眼に触れないように、その前方に銅像より高くふき上げる噴水を作り、これを隠すかのように、カムフラージュしている。その言葉を聞いてオーストリア国民のソ連への嫌悪感を深く覚えしめた。

これと共に思い起こすのは「プラハの春」である。1968年4月、共産党独裁からの政権交代、新政権の社会主義的民主主義の拡大、経済改革の推進など新しい政策をかかげた路線に対し、ワルシャワ条約国は「反革命の危険」と警告し、チェコ政権はこれを頑せず、そのため8月、ソ連、ポーランド、ハンガリー、東ドイツ、ブルガリアの5ヵ国が「社会主義体制の擁護」のため派兵、プラハの街は戦車にじゅうりんされ、多数の国民は銃弾の餌食となり、ソ連を中心とする軍事力に鎮圧されたものの、その傷痕は今なお消えていない。この当時オーストリアにはチェコ支援、反ソの動きがあったが、その際「私どもの見た銅像もオーストリア兵によって嚴重に警備されていたということである。これは「ウィーンのこの銅像を破壊されたときは、ソ連は実力をもってこれに対して報復する」といって撤退したそうである。この話はウィーンのガイドがもらしてくれたことである。その後ハンガリー、さらに昨今のポーランドの労働組合の自由化への動きなど、衛星国の自由主義への傾斜が地下に浸透しているように思える。

国連原子力機構

ウィーン郊外ドナウ河のほとり40階近い高層ビルが、幾何学的模様に棟を連ねている。この地は、晴れた日にはアルプスの連峰が望め、ドナウはその谷間を破り、初めて平原にその流れを現わす景勝の地でもある。

私は今度の旅行でウィーン滞在も予定され、幸いに私の友人である西脇教授が、この研究所



第8図 国連原子力機構

に日本の代表として勤務されているので、この機会にここを見学したいというのは、学会出席とともに一つの大きな目的でもあった。教授は阪大出身で、ここに26年も勤務され、現在ウィーン大学、ハノーバー大学の教授も兼務されている。実は私の金沢大学在任中、私どもの方でアジア太平洋放射線防護の会議を引き受けたとき、国連代表として金沢に滞在、それより親しくし、時に文通も交え、同機構の視察を依頼しておいた。私とともに越山上市厚生病院長、菅野旭川厚生病院長の3名で訪れた。なお、これに附属する研究所は、約30km離れた所にあり、時間の都合で割愛せざるをえなかった。

この建設についてオーストリア政府の強力な誘致運動によってウィーンに作られたもので、恐らく数千億円の費用が注がれたものであろう。これは全部オーストリア政府の負担で、国連はこの施設を借用して事業を行っているわけで、借用料は国連の規約によってタダということにはできず、借用料として年間1ドル払っているということである。まあ天文学的数字と砂粒という対比である。

一通り案内されたが、その大きさに度ぎもを抜かれたものの、原子力については素人に等しい私には理解しかねる所も多かったが、この機構は、公開と平和利用の原則を貫いているのが特色である。私がかつてジュネーブのEC原子力研究所を訪れたときも「公開、非軍事的、基礎的」の3原則を堅持すると

聞いたが、その思想については軌を一にしていると感じた。

西脇教授は色々と話されたうち、西欧諸国は、原発の燃料廃棄物を大西洋に投棄していることで、とくにその安全性について強調されたのは今でも印象に残る。なおもう一つ付け加えるならば、すべての国連機関はそうであるかもしれないが、この警備は国連加盟の各国軍隊によりなされている。ただし日本からは来ていない。平和機関であるこの警備に何故日本から派遣しないのか不思議でならないとの意見もある由。それからこの膨大な建物の中は、退庁時施錠しない。人員が5,000人もおり、数千数百の部屋を施錠されては、夜間の巡視に開扉していたのでは、時間のロスはたまったものではない。すべての部屋は施錠なし、これも公開の原則か。

次に、同教授にウィーン大学医学部に案内してもらった。私は耳鼻咽喉科をみたかったが、連れていかれたのは核医学実験室、建物は古色蒼然たるものであったが、この助教授は懇切丁寧に核医学の診断に関することを説明してくれた。しかし遺憾ながら専門外の私には、その研究の内容は充分には理解しかねた。



第9図 ウィーン大学医学部核医学教室
(右端 西脇教授)

ウィーン大学医学部は、世界的にも有名で、幾多の権威を輩出し、私どもの学生時代聞いた講義にも有名な教授の名が記憶に残っている。

それからもう一つ。私は西脇教授に故国の味として「昆布、オボロ昆布、椎茸、お茶」

をトランクにつめこんでウィンまで持ちこんだ。ところが夫人はドイツ人、22才のお嬢さんと三人暮らし、果たして日本の味を如何に料理されたか、内心こころもとない気分が襲われた。ちなみにこの夫人のお父さんは、ドイツ人科学者として、ソ連にら致され、かの地で客死された由、そのお気の毒な話も聞いた。

ハンガリアを見る

「スパイは踊る」、オーストリアは東西の接点である。独裁社会主義国とちがい両陣営の活動は、何の拘束も受けず情報しゅう集の好適の所らしい。かの有名な映画、「会議は踊る」の舞台はウィンのホーフブルグ宮殿である。この自由なオーストリアから再び共産圏たるハンガリアのブタペストに向う。ウィン東駅を発した国際特急列車は快適である。窓外の平坦な耕地は地平線の彼方まで延びている。小麦の収穫がすでに終わったらしく、切藁は方々にうず高く積み上げられている。しかし農地にはまだトウモロコシ、ビート、ヒマワリの畑が沿線に目がとどく限り続く。その他牧草地には牛の群が草をついばんでいる。日本ではヒマワリは観賞用位のものと思うが、ここでは搾油して食用に使用する。耕地のそれぞれの作物は見事に育って実りの秋を待っている。ハンガリアの国境線を通過する。そのとたん目に飛びこんでくるのはトーチカである。かつて中国大陸や中部太平洋の孤島で苦闘を続けた頃を想起し、ほのかに郷愁じみた気分になる。更に驚いたことは圃場である。オーストリアでは整った列に、背たけも揃い、たわわに実っていたトウモロコシも、ここでは、背たけは大小さまざま、しかも密生せず疎、ヒマワリ畑とて同様、ビートの方を見れば、雑草が生い茂り、どれがビートかなかなか見当もつかない。日本の休耕田でみる雑草と同様に思われる。ただ日本ではビートは甜菜糖の原料とのみ思い込んでいたが、ここでは家畜の飼料として用いられるので、そう力が入

らないのかもしれないが。

今、ソ連ではコルフォーズ、ソフォーズにおける収穫の減少に頭を悩ましているらしい。それは農業人口の減少、若者は都会にあこがれ、また、工業の発展によりその労働力の強化が都市への人口の集中となり、食糧の危機が迫っている。現在、アメリカ、カナダから1,000万tの穀物を輸入している。しかし車窓にみるハンガリアの農耕地は雄大で、波のうねりのように起伏が連なり、そのなかに森林に囲まれた村落があり、教会の尖塔が森の梢をよぎっている。平和そうな牧歌的風情である。ただ、農業従事者であれば、略同一賃金であろう。収穫はある部分を除いて全部政府のものである。プラハで見たトーゼックスの店員も公務員であろうし、農業従事者も公務員であろう。働いても働かなくても同じだという気持ちがあれば、オーストリアのような豊饒な農地のみられないのが首肯ける。

私ども一行はペーチ大学での国際農村医学会ヨーロッパ部会に出席した余暇に附近の農村の見学があった。しかし私は他の視察に時を過ごし、遺憾ながらそれに参加しなかった。

このペーチ市附近の農業について、上野満氏の「東欧農業に問う」の記述から拾ってみよう。ハンガリアの農業形態は、国土の80%は組合農場、14%は国営農場となっている。このペーチ市のある所はバラニヤ県という。人口43万、都市人口25万（ペーチ市17万、コムロ市4万、その他4万）、残り18万は農村人口、村が316である。ハンガリアは1962年より農地の集団化が始まり、中世紀からの古典的農業から近代化へと変貌してきた。このバラニヤ県では組合農場は25万ヘクタール、国営農場は6,000ヘクタールで大部分は協同組合方式である。農産物の収量ではヘクタール当たり、組合農場では小麦5トン、トウモロコシ7.5トン、国営では小麦4.5トン、トウモロコシ5.5トンで、組合農場の方が多い。畜産であるが、組合農場では乳牛1頭当たり年間

3,000ℓ(富山県では乳牛の品種にもよるかもしれないが、5,300ℓ)。協同組合は組合員の利益を守るための共同作業で、出資金も出し、その利潤は還元されるから、増産にはげみ、かつ労働に対する報酬も収益によって附加される。このような状態をみると私的企業ではないが、企業の自由化の傾向もうかがえる。この地はユーゴスラビアと境を接しており、チトー政権からの非同盟化の流れが、身近に感じとれるように思われる。また特徴的なことは家庭農園といわれる私有地をもつことができる。1戸1人当たり0.6ヘクタール、平均3人とすれば、1.8ヘクタール、これが垣根で区切られ、そこには果物、野菜、花卉などが如何にも生き生きと栽培されている。世の人情といおうか、自分の畑に出来たものは自由に販売できるからであろう。この家庭農園で最も力を入れているのは畜産で、肉類の消費量の豚肉50%、牛肉30%を生産し、家庭農園の役割は極めて大きい。ちなみにハンガリア国民の年間の肉類摂取は1人当たり80kg、うち豚肉50kg、鶏肉17kg、牛肉10kg、魚類3kgといわれ、肉類の供給には、家庭農園の意義は極めて重要である。(日本：牛肉3.4kg、豚肉9.6kg、鶏肉7.5kg、その他1.6kg、魚介類34.5kg、1980年：農林省「食料需給表」より)

私はペーチ市内の路上で、一人の老婆が籠や袋にリンゴ、トマト、トウモロコシ、野菜スモモなど道行く人々に売っていたのを見た。これも自家農園産のものであろう。興味を覚えて立ち止まり、その商いを眺めた。



第10図 自家農園の野菜や果物を売る老婆
(ハンガリア・ペーチ)

さてソ連国内の穀倉はボルガの流れに沿うウクライナである。この広大な沃野があっても2億6千万の国民は養えない。世界一の国土を有しながらも、ロシヤ共和国といわれる北方地帯、さらにシベリアは寒冷にさいなまれ穀物の生産量は極めて少ない。アメリカ、カナダからの輸入にしてもまかないきれない。どうしても南の衛星国に頼らなければならない。ポーランド、チェコ、ハンガリア、ルーマニア、東独などはソ連の食糧基地である。強大な軍事力で、これらの諸国の離脱を監視している。南への進出、かつて黒海沿岸の肥沃な土地も、トルコ、ベルシャから奪取した帝政時代からの宿命であろう。しかもポーランド労働組合の自由化の動き、ハンガリーにみられる農業の組合方式による自由化、ユーゴの非同盟など、南への指向の断絶は、ソ連生存の最大関心事であろう。アフガン侵攻もその現われとみるのは偏見だろうか。

東西の緊迫

私どもは、ブタベストのゲレルト・ホテルに一夜の憩いをとった。このホテルは60年の歴史をもつ由緒あるもので、温泉や屋内温泉プールがある。ちなみにこの温泉はリューマチによく効き、3ヵ月で治癒すると盛んにPRしていた。これに関係あるかどうか知らないが、ブタベスト大学医学部にはリューマチについての権威がいるそうで、ヨーロッパ各国から治療を求めて多く患者が集まってくるともいわれている。このホテルはゲレルト丘の麓、ドナウのほとり、景観はすばらしかった。

しかし、ペーチに向う早朝、飛行機の爆音に眼をさまされた。窓外は数群の編隊が、真上に飛来、その間ターボジェットヘリコプターが過ぎ去ってゆく。さらにグライダーを引っぱりながら軍用機が頭上を過ぎ去る。また遠くをみれば、空から綿をちぎった様に見えるパラシュート降下、ドナウ河上には水上艦艇が、周辺に砲口をさらしている。演習ではあ



第11図 グライダーをひっぱる軍用飛行機
(ブタペスト)

るとはいえ、アメリカの傘の下に平安の夢をむさぼっている私どもには余り見なれない情景である。私は5年半の戦場で砲爆撃にこそさらされていたが、このような近代装備の軍備は見たことがなかった。またペーチのホテルや市内の所々の石堀には銃眼が作られており、ここではワルシャワ条約から離れた対ユーゴに対するものかもしれない。1956年、生活



第12図 ホテルの外壁に作られた銃眼(ペーチ)

改善と自由を求めた国民感情から立ち上ったブタペストの労働者と学生のデモから、全国的に暴動心が拡大し、その鎮圧に出勤したソ連軍への抵抗は「ハンガリア事件」として「プラハの春」とともに全世界の人々の脳裏に刻まれている。この「ハンガリア事件」は勤労者党指導者の過去の誤りによる国民の不満や同党の分裂状態を利用した国内反動派が、国際帝国主義の指導と援助の下で起こした反革命という東側のきめつけに対しても良心的の一般大衆がこれに参加したことは事実である。これも多数の犠牲を出しソ連軍により鎮圧され

ている。このことで今なお物心両面で与えた損害は国民の心のなかに残っているといわれている。

この私どもの見た近代整備の演習も、東側の強大な軍事力の誇示と私には思えて仕方がなかった。東西両陣営に不測の事態が起こったとき、衛星諸国が鉄の団結で対処しうるかどうか、また衛星国内の自由化の動きなどからどうも底流には無気味な反体制の萌芽が芽生えているのではなからうか。私のような行きずりのエトランジェーの皮想的な感覚だけでは思えないような気がする。

む す び

私は今回2ヵ所の学術集會に出席したが、その余暇に観光のプログラムが組まれていた。観光は宮殿、教会、公園などが主で、中世紀からの建造物は、流石文化の香が高かった。ヨーロッパは古くから文化が栄え、東洋文化とその趣を異にし、眼をみはるものがある。しかし余りにも多くのものを見させられるので特別のものを除き記憶から薄れるような気がする。私は海外に旅行する場合、つとめて庶民の生活を見、語り合いその国情を探ることにつとめている。今までアメリカ、南米、東南アジア、近東、西欧など農村を歩き、心の糧として残る経験をえている。しかし社会主義国の扉は固い。1975年、公の資格でソ連を訪れた。モスクワで政府の海外交流委員会で「ソフォース」「コルフォース」の視察を希望したが拒否された。一つの理由は外国人は指定された所より30km以上は旅行禁止という相互条約があるとのことであつた。話によると外国人は個人の住居に、ことに農村では入れないそうである。しかしチェコやハンガリアはそれ程のことはないようで、浅薄な観察であつたが、街で見、村を眺めた印象を綴ってみた。以上私の感じとった東欧の姿であり、またこの記録は、私自身の個人的見解として受けとってもらいたい。